

2010 年度卒業論文

論文題目

社会教育における食農教育実践の意義  
—「子育て農業応援団」の事例研究を通して—

金沢大学 教育学部  
学校教育教員養成課程 教育基礎コース  
0702010013  
梅津 陽

## 【第2章 「子育て農業応援団」の取り組み】

### 〔第1節 「子育て農業応援団」の概要と設立の経緯〕

#### (1) 「子育て農業応援団」の概要

「子育て農業応援団」は、農林水産省の「教育ファーム」という取り組みのモデル事業として補助を得ながら、子育て中でも親子で取り組める農業を目指して平成20年5月より代表の山本実千代さんを中心に、8家族(24人)、スタッフ7人、ボランティア12人で耕作放棄地を開墾し畑を作ることから始まった。現在では16家族60人近くの参加者となっている。この畑は金沢大学角間キャンパスから、石川県道・富山県道27号線(金沢井波線)を富山県方面に向かって15分ほど走った、石川県と富山県の県境付近に位置しており、一年を通して様々な作物を育てて収穫することができる<sup>1</sup>。基本的には月に2回の活動となっており、朝の9時半に集合し始め、草むしりや収穫、苗植えなどの作業を行い、晴れた日には畑でビニールシートを広げて昼食を取る。昼過ぎに畑を後にして、近くの「ぬく森の里」で温泉に入り、少し休憩をした後にそれぞれで帰宅するというのが定番のスケジュールである。収穫した作物は各家庭に持ち帰ってそれぞれで調理して食べることもあれば、収穫祭など、団体の活動として団員が集まり調理して食べるということも行われている。この団体では生産を主としているわけではなく、あくまでも農業体験を楽しむということが目的のようである。活動に参加する親子は、毎回同じ参加者というわけではないが、いつも大体5~8家族ほどである。基本的には未就学児を対象としているが、その兄弟なども参加するため、小学生も一緒に活動している。このように、参加している子どもたちの年齢は様々である。

「子育て農業応援団」は法人格を取得していないNPOの団体である。この団体は国の「教育ファーム」という取り組みのモデル事業として補助金を得ながら2年間活動を行ってきたが、3年目からは補助から外れ、補助金が得られなくなってしまった。活動を行っていくには苗や種などの購入、保険の加入などお金が必要なことが多々あり、収入がなくなってしまっただけではこれまで補助金を利用して行ってきた活動を思うように行うことができない。そこで「子育て農業応援団」のスタッフや参加している保護者を交えて話し合いを行った結果、保険をかけるお金とその都度の種・苗の購入料などの、最低限の集金を行いながら活動を続けていくことが決まった。国のモデル事業から外れた3年目から集金しているのは、一家族3千円の年会費(登録料)で、それは家族ごとに保険をかけるために使われる。さらにその度ごとの苗・種代として1回千円集めており、2010年度は2回集金した。この「子育て農業応援団」の活動は利益を求めものではないため、集金も最低限必要な額に設定して遣り繰りしているのである。

「子育て農業応援団」では、春から秋にかけて畑の草むしりや種植え・苗植え、水やりから収穫などの他に、案山子を作ったり収穫したものを使って調理をしたりする活動、牧場見学やそば打ち体験なども行われてきた。3年目の5月下旬には、植える稲の種類を変えることで田んぼに絵を描く「田んぼにお絵かき」といった活動も行われた。この活動は石川県では初めての取り組みとなっており、富山県から経験者を招いての活動となった。冬は畑での活動は行われない。その代わりに調理の活動や、りんご狩りや市場の見学、他団体との交流会などが行われる。

---

<sup>1</sup> 「子育て農業応援団」ホームページ <http://kosodatenougyou.seesaa.net/>

「子育て農業応援団」は、「子育て農業ねっと」というものを平成 21 年に立ち上げ、石川県内の「七尾市 じたばた農園」や「加賀市 畑ひろば まんま」といった団体とも交流することで、情報交換をしたり、それぞれの苗を交換し、他の地域の野菜を育てたりするというも行っている。また、「子育て農業応援団」は「子育て生活応援団」という団体とも関わりがあり、子育て支援の活動とも連携している。

## (2) 「子育て農業応援団」立ち上げの経緯

代表の山本さんは 26 歳のときにお子さんのマサテル君を出産した。マサテル君には生まれつき知的障がいがあり、このことがきっかけで山本さんは様々な活動を行っていく。障がいを持つ我が子を育てる上で様々な苦労や困難に直面し、行政などの機関も含め、あらゆるところへ相談のために足を運んだという。マサテル君が通う学校の保護者会では「学校以外にどこも行くところがないんだよね、って。子どもたちは」ということが話題になっていたそうだ。また、山本さんが以前住んでいたというある地域の一带は水商売をしている人が多く住んでいるようで、子育てをしていく上で困難を抱えている母親が多かったのだという。自然と山本さんの自宅が子どもたちや母親たちの“居場所”となっていき、たくさんの人たちが集まって来るうちに金銭面で苦労するようになった。そのことがきっかけとなり、みんなで支え合いながら子育てをしていけたらという願いを込め、子どもたちの居場所として「日常生活支援サポートハウス」（以下「サポートハウス」）を立ち上げた。こうして 2003 年に「サポートハウス」を立ち上げる以前にも、2000 年には知的障がい児の学校以外の活動の場として「ポテトの会」を、2002 年には知的障がい児の学習支援活動である「スマイルクラブ」をそれぞれ立ち上げている<sup>2</sup>。

「サポートハウス」は、現在の山本さん自身の自宅を開放し、障がいを持つ・持たないに関わらず、誰でも利用することのできる施設として立ち上げられた。「サポートハウス」の理念として、山本さんが作成した会員向けの冊子には、以下のように記されている。

サポートハウスのモットーは

どの子ども、この子どもみんな一緒だよ！分けへだてはありません！  
お互いを思いやり、助け合いながら個人の成長をはかります！  
共に学び、共に支え合いながら協生・協存を目指します！

このような理念の下、「サポートハウス」の主な取り組みとして、

- ・ 半日、一日の託児預かりの場所として
- ・ 子どもたちの余暇活動の場所として
- ・ 保護者の方の急な外出・仕事上の都合などによる預け先として
- ・ 夏休み・冬休み・春休みなど学校の長期休暇時の集う場所として
- ・ その他、学童保育としての利用や学校以外の学びの場として
- ・ 子育て相談・教育相談及び、日常生活サポーターの派遣
- ・ 保護者の交流の場所として

などといった、利用者のニーズに合わせて自由に利用することのできる場としての活動を行って

<sup>2</sup> 浜中香織「「共に生きる」を探して—多様性を受け入れるサポートハウスの事例研究—」2008 年度金沢大学卒業論文。

おり、それぞれの利用の仕方によって利用料金を設定している。

山本さんは「サポートハウス」の運営に当たっての基本スタイルについて、行政が用意したシステムや制度の枠からもれてくる人の受け皿になる、ということを目指しているという。社会には、学校や保育所、子育て支援、障がい者支援など様々な制度やシステムが存在する。しかし、その枠にはまらず、行政のサービスなどを受けられない人がたくさんいるという。この現状を山本さん自身の経験の中で目の当たりにしたことで、山本さんは「そういう人たちのやっぱり、受け皿になっていきたい。っていうのは、自分の活動の原点だと思ってるから、そこはそこでぶれないようにしたいし」という信念を持っている。この「サポートハウス」を活動の起点とし、山本さんは様々な活動を行っていく。

多くの活動を通して広くネットワークを広げていく中で、「子育て生活応援団」という子育て支援のネットワークグループに関わっていく。山本さんは、主に健常者の子どもを持つ親を対象として支援を行っている「子育て生活応援団」の取り組みに加わり、障がい者の支援をしてきた視点からできることを共に行ってきた。行政との関わりもこうした取り組みの流れの中で深まっていく。「サポートハウス」としての活動をしていく中で金沢市の制度やサービスを利用したり、活動を行う場の紹介を依頼したりすることで、行政関係の人とも出会い、連携していく。

「サポートハウス」として農業に関わったきっかけは、現在も「サポートハウス」のスタッフとして活動している森さんという方との出会いだった。森さんは自然農を行っていた方で、農業に関する知識は豊富だった。その知識と経験を生かし、「子育て農業応援団」や「サポートハウス」における農作業を支える重要な役割を担っている。さらに、畑で過ごす時間というのは「ハンディのある子たちにとっては、ゆっくりした時の流れなんで、時間に追われなくていいのね」と山本さんは話す。また、畑の仕事はモノを運んだり水をやったり草をむしったりと単純な作業が多い。そういったメリットもあったため、「サポートハウス」として農業に関わっていった。こうした活動を行っていたこともあって、北陸農政局から、「教育ファーム」という国の事業を受けてくれないかという声がかかった。そこで山本さんは教育ファーム推進協議会の設立を要請し、「子育て農業応援団」が発足した。山本さんは、「子育て農業応援団」以外にも、様々な活動を行っている。例えば、児童虐待防止の啓発活動を行う「オレンジリボンキャンペーン」の実行委員でもあり、父親支援のFSNファシリテーター<sup>3</sup>としても活動を行っている。他にも男女共同参画に関わる活動を行ったりと、山本さんには休日がないといっても過言ではないほど、たくさんの活動を行っている。それらの活動の全ては、山本さんが「土台があつてのことなのよね」というように、「サポートハウス」が土台となっている。この「子育て農業応援団」も「サポートハウス」という土台があつての組織の一つなのである。

### (3) 「教育ファーム」

農林水産省における「教育ファーム」については、第1章において簡単に述べたが、ここで改めて「教育ファーム」についての概要を記しておく。「食育基本法」では「農林漁業に関する多様

---

<sup>3</sup> **Father's Supporters Network** ファシリテーター。父親支援の専門家のこと。日本で初めて開発された父親向け研修プログラム「お父さん応援プログラム」においてワークショップを行う。（「お父さん応援プロジェクト」ホームページより [http://ccn.niiza-ksdt.com/papa/p\\_index.html](http://ccn.niiza-ksdt.com/papa/p_index.html) 2011年1月14日閲覧。

な体験の機会を積極的に提供し、自然の恩恵と食に関わる人々の活動の重要性について、国民の理解が深まるよう努める」<sup>4</sup>ということが求められており、さらに「食育推進基本計画」において、「食に関する関心や理解の増進を図るためには農林水産物の生産に関する体験活動の機会を提供することが重要」とされ、自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めること等を目的として一連の農作業等の体験の機会を提供する「教育ファーム」の取組の推進が目標に掲げられている<sup>5</sup>。「教育ファーム」とは、単なる農林漁業の体験にとどまらず、食や農の知識・技術の習得や人間の成長過程に対応した体系的な取組の推進と、取組主体間の有機的な連携を図りながら、地域の活動として進めていくというものである<sup>6</sup>。また、「教育ファーム」には子どもたちの「食」に関する意識の向上だけではなく、「親と子、消費者と農業者、地域住民と都市住民など様々な人と人がふれあう場を提供することにより、親子の絆をはじめとして、効率化社会の中で希薄になりがちな人間関係を取り戻し、家族や地域コミュニティの再生につなげていくことも期待<sup>7</sup>」される。このことに関連し、「教育ファーム」の推進の目的として以下の6つが挙げられている<sup>8</sup>。

- ア. 生産の苦勞・喜び、地域農産物に対する理解
- イ. 食や命のありがたさに対する理解
- ウ. 地域の食文化、伝統に対する理解
- エ. 家族のコミュニケーションの構築
- オ. 人とのつながり、地域の再生・活性化
- カ. 子どもたちの自らが考える力の醸成

以上の目的を念頭に置きながら、それぞれの市町村が推進主体となり、学校教育を始めとして、農林漁業者、その他農林漁業に関する団体やNPOのような市民団体など、様々な主体により取り組まれている地域の活動として連携させ計画的に推進していくとしている。さらに、この取り組みは一過性のものとはせず、持続的に行うべきものとして定められている。この取り組みを担う主体の一つとして、「子育て農業応援団」も活動を展開しているというわけである。

なお、この「教育ファーム」の事業は事業仕分けによって廃止が決定しており、北陸ブロック教育ファーム推進協議会については2010年10月25日の第6回協議会をもって一旦休止するということが決まっている。

#### (4) 「子育て農業応援団」の運営における苦勞

「子育て農業応援団」の活動を周知させていくということが難しかったと山本さんは話す。「子育て支援」というものと「農業」というものを組み合わせた活動というのは今までに無いものであったため、どうやって知らせていくかということから始めなければならなかったのだという。しかし山本さんにはこれまで築いてきた広いネットワークがあった。「サポートハウス」という土

<sup>4</sup> 「食育基本法」第11条。

<sup>5</sup> 「食育基本計画」第2 食育の推進の目標に関する事項。

<sup>6</sup> 北陸ブロック教育ファーム推進協議会資料「教育ファームの意義・理念と目的（案）」

<sup>7</sup> 農林水産省ホームページ [http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/s\\_edufarm/index.html](http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/s_edufarm/index.html) 2010年11月27日閲覧。

<sup>8</sup> 北陸ブロック教育ファーム推進協議会資料「教育ファームの意義・理念と目的（案）」

台の関係者をはじめ、「子育て広場」という、親子が訪れて遊んだりくつろいだりする場所に来ている親に向けて発信していくなどして、「子育て農業応援団」という新しい取り組みを知らせていった。しかし今では、活動に参加している親子たちからの発信も増えてきているという。山本さんが言うように、参加している保護者の中には、友達や知り合いに誘われたのが参加のきっかけであるという人が数名いる。ある母親は、「同じ幼稚園の、(「子育て農業応援団」に)入った人に、行かんかって言われて、参加しました」と話す。同じように、「上の子が絵習ってて、創作教室って、Wさんのとこで習ってって、Wさんから、こういうのやっとなって、もしよかったら見に来んかっていうのを言われて」参加した母親もいる。Wさんとは、「子育て農業応援団」に参加している保護者のうちの一人である。このように、幼稚園や保育園、習い事などの母親同士のつながりによって「子育て農業応援団」の存在を知り、参加してみたところ農業の面白さに気付いて、関わっていくことを決めたという人が増えてきているのである。

山本さんが「子育て農業応援団」の運営における苦勞として挙げるのは、小さな子どもたちを対象としているため安全への配慮が欠かせないということである。山本さんは常にインフルエンザなどの流行性の病気に敏感に注意を払い、情報を把握していくことを心がけているそうだ。保険にも加入し、何かあったときの対応を説明をしたり、「畑のお約束」としてルールを決めたりすることで、不安材料を消していくということにも気を付けていると話してくれた。また、一日の活動スケジュールを細かく決めすぎないようにしているという。それは、小さな子どもたちが多く、ゆっくり活動できるようにするためだそうだ。確かに、管理・運営する側としては時間を細かく決めたほうが活動を指揮しやすい。しかしそこをあえて決めないで行うというところから、焦らずゆっくりとした気持ちで活動できることを重視した山本さんの思いが大きく表れていると感ずる。

## 〔第2節 「子育て農業応援団」の活動〕

この節においては、「子育て農業応援団」の活動内容、活動の様子について紹介する。「子育て農業応援団」は第1節でも述べたように、石川県と富山県の県境にある耕作放棄地であった土地を開墾し、多くの作物を育てている。

毎月第2・第4日曜日に活動日が設けられており、まずはスタッフが午前9時30分より少し前に集合し、後から次々と参加者がやってくる。畑にやってきた家族から順に、山本さんの指示に従って農作業を開始する。作業内容は日によってまちまちであるが、野菜の種・苗を植える、草むしり、水やり、収穫などが主な仕事である。天気の良い日は家族ごとにお弁当を持参し、畑にシートを引いて昼食をとることもあり、山本さんは大きな鍋にカレーや「めった汁」を作って持参し、参加者やスタッフに振舞うこともある。子どもたちは畑作業の合間を見つけては花を摘んだり走り回って遊んだりしている。虫を見つけて大騒ぎをしたり、保護者に「見てー！」と見せたりすることもある。

農作業が一通り終わり昼食を済ませると、一行はすぐ近くの富山県南砺市にある「ぬく森の郷」という温泉施設に向かい、休憩を取ってからそれぞれ帰宅する。中には保護者が仕事などの用事があるために山本さんに預けられた子どもたちがいるときもあり、その子どもたちは山本さんとともに山本さんの自宅でもある「サポートハウス」に向かい、保護者が迎えに来るまでの時間をそこで過ごす。

以上が大まかな「子育て農業応援団」の一日のスケジュールである。以下には年間スケジュール（資料1）と、筆者がボランティアスタッフとして参加してきた活動の内容をいくつか紹介していく。以下に述べる事例は、「子育て農業応援団」の活動時のフィールドノート及びその日の活動の内容を振り返って記録したものをもとにまとめたものである。

【資料1 「子育て農業応援団」年間スケジュール】

回	日付	主な活動内容	筆者参加	参加人数
<b>2009年度</b>				
1	11/8	サトイモ・ハクサイの収穫	○	35名
2	11/22	ジャガイモ、サラダごぼう・ハクサイ・黒ごまの収穫	○	27名
3	11/28	合同収穫祭（～29日）※金沢・七尾・加賀の交流 豆腐作り、めった汁作り、手焼きせんべい体験、ダイコン・赤カブの収穫、 りんご狩り	○ 1日目 のみ	67名
4	12/6	調理体験 サトイモの芋もち・リンゴジャム・青しそのおにぎり作り	×	
5	1/17	調理体験 もすけばたもち・きなこ作り	×	
6	2/7	子育て農業フォーラム	○	145名
<b>2010年度</b>				
7	4/25	ニンジン・ヒマワリの種まき、ピーマン・スナックエンドウ・ソラマメの 苗植え、草むしり、水やり、大豆の苗作り、田んぼを耕す作業…（1）	○	39名
8	5/4	ピーマン・カボチャ・トマト・ミニトマト・ナスの苗植え、耕運機で畑を 耕す作業、水やり、山菜採り、田んぼの水入れ	○	15名
9	5/5	水やり、畝作り、田んぼで泥遊び、山菜採り…（2）	○	33名
10	5/23	田んぼにお絵かき…（2）	○	45名
11	6/1	清泉幼稚園ファーム活動（清泉幼稚園の園児、先生、保護者のみ参加） サトイモ・落花生の苗植え、青シソの種まき、水やり	○	19名
12	6/13	閑屋カボチャ・落花生の苗植え、トマト、キュウリの支柱たて作業	×	
13	6/27	タマネギ・ソラマメの収穫	×	
14	7/11	ジャガイモ（メイクイン・男爵・きたあかり・インカのめざめ・ジャドーク クイン）・キュウリ・ナス・ズッキーニの収穫、	×	
15	7/25	ニンジン・キュウリ・ナス・トマト・ピーマン・甘ながとうがらし・モロ ヘイヤ・ズッキーニ・つるなしインゲン・打木赤皮甘くりカボチャの収穫、 畝作り、水やり	×	
16	7/31	ミステリーキャンプ（～8月1日）※畑にテントを張って泊まる ピーマン・ナス・トマト・ミニトマト・ししとうの収穫、バーベキュー、 花火	×	
17	8/8	源助大根・金美人参の種まき、キュウリ・トマト・ナス・オクラ・ゴーヤ の収穫、水やり	×	
18	9/5	キュウリ・ナス・オクラ・ピーマン・カボチャの収穫	×	
19	9/11	お泊り交流会（～9月12日）流しそうめん、川遊び、イワナつかみどり体 験、イワナの塩焼き作り、	×	



20	9/20	ピーマン・ゴーヤ・ナス・カボチャの収穫、ハクサイの苗植え、倒れた稲を起こす作業	○	26名
21	9/26	ピーマン・ゴーヤ・ナス・カボチャ・千石豆・茗荷の収穫、ダイコンの種まき・キャベツの苗植え	○	23名
22	10/10	ダイコン・大豆の収穫	×	
23	10/24	ダイコンの間引き、ダイコン・ニンジン・サトイモ・サツマイモ・ウコンの収穫、稲刈り…（3）	○	29名
24	11/14	落花生・ハクサイ・菊芋・ヤーコンの収穫、茹でピー	○	46名
25	11/23	わいわい食パーティ	×	
26	11/28	畑の片付け作業（大雨のため途中で中止になる） 収穫祭の打ち合わせ（スタッフのみ、筆者参加）	○	10名
27	12/4	収穫祭（～12月5日） Tシャツのウコン染め体験、芋煮鍋作り…（4）	○	60名
28	12/19	ハクサイ、ダイコンの収穫、畑の片付け作業	○	21名
29	1/10	お好み焼きパーティ（畑で収穫した菊芋を使用）	×	
30	1/23	子育て農業フォーラム	○	79名

これらの農作業の活動以外に、「教育プラザ富樫」という施設にて毎月第3日曜日に開催される「わいわいバザール」というフリーマーケットなどを行う行事に参加するというのも「子育て農業応援団」の活動の一つである。

なお、筆者は2010年10月25日に行われた第6回「北陸ブロック教育ファーム推進協議会」にも参加させていただいた。また、山本さんの紹介で、児童虐待防止の啓発活動である「オレンジリボンキャンペーン」の活動や父親支援のファシリテーター育成講座など、「子育て農業応援団」の活動以外に山本さんが行っているいくつかの活動にボランティアとして参加させていただいた。

(1)「種だって生きとるんやから」 2010年4月25日

この日は2010年度初めてのファーム活動の日である。この日の予定は、何も植えられていない畑に、ニンジン・ピーマン・スナップエンドウ・ソラマメの種や苗を植え、草むしり、大豆の苗作り、田んぼを耕すなどといった作業を行う。さらに、代表の山本さんが「大好きな花」だというヒマワリの種も畑のまわりにまくことになっていた。

まずはピーマン、スナップエンドウ、ソラマメの苗植えである。子どもたちには一人に一つずつ苗が与えられた。スタッフの方に植え方を教わりながら保護者と共にスコップで土に穴を掘り、恐る恐る苗をポットから出して丁寧に植える。小学生の子どもたちは慣れた手つきで苗をポットから取り出し、余った苗を見つけては「これもやっていい？」と尋ね、次々と植えていった。まだ小さな子どもたちは保護者やスタッフに手を取られ、「土、ポンポンってしようね」と声を掛けられながら、一緒に植えた苗のまわりに土をかぶせて押し固めるなど、ゆっくりとしたペースで取り組んでいる様子が見られた。



苗を植える様子 筆者撮影

次にニンジンの種をまく。小さな子どもたちにとって、小さな種を土の上に均一にばらばらとまくという作業は難しいようで、スタッフの方々も「できるかな」と話していた。芽が出てきて間引きをするときに、密集して芽が生えていると後で間引きがしにくくなるためである。しかし何事も経験ということなのか、「ちょっとずつまくんやよ」と常に声を掛けながら、小さな子どもたちも種まきに参加した。大人や年上の子どもたちがうまく均一に種をまく姿を見ながら、小さな子どもたちも慎重に種をまいていく。



水やりの様子 筆者撮影

種まきが終わり、苗や種を植えたところに丁寧に水をやる。この日はとても天気が良かったため、少し多めに水をやるように指示があった。子どもたちは水やりがとても好きなようで、小さなジョウロを一人に一つずつ与えられると積極的に水やりをしていた。山本さんは、子どもたちは水やりが好きだと話し、それは「水やり」から次第に「水遊び」へと変わっていくからだそうだ。確かに、ある程度水をやり終えると子どもたちはジョウロを使って水遊びを始めてしまった。

ある子どもが遊んでいて、先ほどニンジンの種を植えた畝の上を走って踏んでしまった。その様子をそばで見ていたその子どもの保護者が血相を変えて、畝の上を走ってしまったことに対して厳しく叱っていた。保護者が子どもに対して言ったのは、「あんただって踏まれたら痛いやろ。種だってしゃべれんだけで、踏まれたら痛いんやから。種だって生きとるんやからね」という、野菜の命を感じさせる内容であった。

子どもたちは、このようにして作物にも「命」があること、野菜も生きていくということを学んでいくのであろう。子どもたちは少しずつ育っていく野菜を見ることで「命」を実感することができ、こうして保護者から直接「命」についての話を聞くことで、実感を伴った理解が可能と

なるのではないか。また、保護者やスタッフなどの大人たちも、畑では「命」についての話をしやすい。「命」という目に見えないものは子どもたちにとって理解し難いものであるが、このようにして目の前に育っている「命」を感じられる畑で活動を行うからこそ、子どもたちに「命」を示しながら教えることができるのである。こうして、「子育て農業応援団」での活動の中で子どもたちは「命」について自然な流れで学んでいくことができるということを、この日の活動の中で実感することができた。

水やりの後は、大豆の苗づくりを行った。土を入れたポットに水を吸わせた大豆を3粒ほど入れ、上から軽く土をかける。これを各家庭に持ち帰り、それぞれで芽出しを行う。筆者もいくつかポットを持ち帰り、自宅で育てるということを体験させていただいた。「子育て農業応援団」の活動は基本的に月2回となっているため、家庭に帰っても「農業に関わっている」ということや、「自分たちが育てた」ということが実感できるようにという工夫である。ここからも山本さんの、野菜作りに関わっているという実感を持って欲しいという思いが表れている。大豆の種を入れたポットを作るときに、何度か経験のある子どもが作り方を教えてくれた。その教え方が得意気で印象的であった。土はどれくらい入れるのか、種はどのくらいの深さで植えればよいのかなど細かく教えてくれ、いつもは筆者にも「できないからやって」と頼むこともある子どもたちは、やったことがあるということや、できるようになったということに対して自信がついたような様子であった。このようにして、子どもたちは一つ一つできなかったことができるようになることで自分に自信を持つことができるようになる。農作業は毎年同じような作業を繰り返すため、一年前に学んだことを次の年に生かせるという学びの流れがある。そして一年前に農作業をしたときの様子と比べることが容易であり、保護者が我が子の成長を感じたり、子どもたちが自身の成長を実感したりしやすいのではないか。

この後は、山本さんの好きなヒマワリの種と、苗作りで余った大豆を畑のまわりに植え、活動は終了した。活動終了後に筆者は山本さんに連れられて、畑のまわりに生えている山菜を採った。「ノビル」という山菜を採り、山本さんに調理の仕方まで教わってその日の夕食にした。筆者は山菜などを自分で採って調理して食べるという機会がこれまでほとんどなかったため、とても新鮮に感じた。山本さんは、「子育て農業応援団」に参加している家族だけではなく、筆者のようなボランティアスタッフの若者にも様々な体験の場を提供してくれている。

## (2) 「どろんこ遊び」と「田んぼにお絵かき」 2010年5月5日、23日

5月はゴールデンウィークを利用することができるため、いつもより活動日が多い月であった。5月5日はとても天気が良く、水やりが念入りに行われた。また、雑草も生い茂っていたため、子どもたちも鎌を持って草むしりを行った。鎌を使って草を刈り取る姿は少し危なっかしかったが、保護者やスタッフに見守られながら一生懸命になって作業に打ち込んでいた。子どもたちは「鎌を使う」ということで少し大人になったような気がするのか、鎌を持った姿はどこかたくましかった。そして草を刈り取っては「こんなに取れたよ」と自慢げに見せてくれた。筆者が「すごいね」と声を掛けると、さらに得意気に草を刈り取って見せた。

この日は5月23日に行われる「田んぼにお絵かき」というイベントに向けて、小さな田んぼへの水入れが行われた。近くの川から水を引き、小さな田んぼに水がどんどん入っていく。水と土を混ぜる作業の代わりに、山本さんの提案で子どもたちはパンツ一枚になって田んぼに入り、泥

遊びが始まった。子どもたちは泥に足をとられて身動きが取れなくなっているものもいれば、泥を投げ合って遊ぶものもいた。中には、年上の子どもたちの泥の投げ合いに巻き込まれ、顔が泥だらけになって泣いてしまう子もいた。大人たちは「こっち投げんといてー」と子どもたちが投げ

る泥に当たらないようにするのに一生懸命であった。たちはとてもいきいきとしていて、普段なら保護者に嫌な顔をされる泥遊びが許されたからなのか、羽目を外して元気に遊んでいた。それを周りで見ると大人たちも、「こんな風に、一生に一度くらいは馬鹿みたいになってもいいもんだよね」と笑っていた。確かに、このようにして田んぼに入って泥だらけになるということは、現代の子どもたちにとっては貴重な経験となるのかもしれない。「子育て農業応援団」に参加している子どもたちは、このような素晴らしい経験をすることが



田んぼで泥遊び 筆者撮影

できる機会に恵まれていると感じた。この後、子どもたちは身体の泥を洗い流すために横を流れる小さな川の水をかけられていた。天気が良いとはいえ、まだ5月になったばかりであったために川の水も冷たく、寒さでぶるぶると震えていた。

そして23日、待ちに待った「田んぼにお絵かき」のイベント当日はあいにくの雨であった。それにもかかわらず、子どもたちは合羽を着て嬉しそうに畑にやってきた。

「田んぼにお絵かき」とは、山形県楡引町で1999年に行われたのが始まりで、富山県の砺波氏で取り組まれているものである。もち米と、古代米の紫色の稲といった2種類の稲を植え、その植え方で田んぼに大きな絵を描くというイベントであり、石川県では初めての試みであった。当日は富山県で「田んぼにお絵かき」の取り組みを行っている方を先生として招き、指導をしていただいた。「子育て農業応援団」では、小さな田んぼいっぱい「アンパンマン」の絵を描くことになっていた。

まずは、「アンパンマン」の顔を描く目印として、割り箸を刺していく。これは先生の指示に従い、スタッフなどの大人たちが協力して行った。そこに古代米の苗を植えていく。これは割り箸の目印に沿って植えていくので、子どもたちには難しいということになり保護者たちが行く。子どもたちは一生懸命田植えを行う保護者をじっと見つめていた。そしてやっと、子どもたちの出番である。古代米の苗が植えられていない場所に、もち米の苗を植える。裸足になって田んぼに



田植えをする子どもたち 筆者撮影

入り、大人たちが植えた古代米の苗を踏まないように注意しながら、子どもたちも丁寧に苗を植えていく。このときには子どもたちも夢中になっており、雨が降っていることも忘れて楽しそうであった。大人たちが、「ここら辺まだ植えてないよ」と声を掛けると、すぐさま苗をもって駆けつけ、一生懸命植えていた。苗の束を片手に持ち、2~3本ずつ取って植える。このとき、泥にしっかりと植えなければ水で流れてしまうので少し難しそうであったが、植えているうちに小さな子どもたちも上手に植えるこ



とができるようになっていた。

大人たちが植えた古代米の苗は濃い紫色をしており、子どもたちが植えたもち米は私たちも良く目にする緑色の苗である。このように色が異なるため、緑色の背景に紫色の「アンパンマン」の絵が浮かびあがるというわけである。稲によって描かれた絵は、秋になってもち米が小麦色に色付いたり、稲刈りをしたりする度に違った表情を見せるという。それを楽しみにしながら、子どもたちだけではなく保護者やスタッフなどの大人たちも笑顔で田植えを行った。

このようにして、「子育て農業応援団」では新しい取り組みを積極的に取り入れている。この前年度は「バケツ稲」という、各家庭に稲を持ち帰りバケツで育てる取り組みを行ったという。この年に行った「田んぼにお絵かき」という取り組みは前述し先にも述べたように石川県では初めての取り組みであり、もちろん子どもたちにとっても、保護者にとっても初めての経験であったはずである。同じ「田植え」という取り組みではあっても、こうして取り組みの方法が異なると、子どもたちの興味をより引き付けることができる。また、「育っていくと絵になる」という予告をしておくことで子どもたちは稲の成長を楽しみに待つようになり、季節が変わるにつれて田んぼに描かれた絵の表情が変わっていく様子を見ることで、稲の成長を感じることができる。「子育て農業応援団」の取り組みには子どもたちのより充実した学びが期待される。

### (3) 野菜との闘い、自然との闘い 2010年10月24日

秋も深まり、「子育て農業応援団」の活動は収穫が中心となってきた。この日は、ダイコンの間引き、ダイコン・ニンジン・サトイモ・サツマイモ・ウコンの収穫と稲刈りが予定されていた。

ダイコンの間引きでは、間引いたものも食べられるということを手本さんから教わった。そしていつものように、「どうやって食べるんですか」という保護者からの声が上がると。筆者も「子育て農業応援団」のスタッフとして活動を行っていく中で、山本さんに調理の仕方を教わって初めて食べた野菜や山菜が何種類もある。

ダイコンやニンジン収穫では、子どもたちにとっては野菜との戦いであった。これらを引き抜く際には意外と力が必要であり、小さな子どもたちは苦戦していた。「腰を落として、葉っぱの根元を持って、真上に引き抜くんやよ」「そんなんしたら折れてしまうよ」などと、大人たちからアドバイスを受けながら、一生懸命に引き抜く。中には保護者と一緒に「せーの」の合図で引き抜く子どもたちもいた。苦戦していたものの、慣れてくると次から次へと引き抜く子どももいた。大きなダイコンを見せて、得意気に笑っている様子が微笑ましかった。ダイコンは大きくて引き抜くのに一苦労であったが、それよりもそのあとに収穫したニンジンの方に苦戦しているようであった。「ニンジンの方が大変やった」と、子どもたちも予想とは異なった手ごたえに驚いていたようであった。

しかし、更なる強敵はサトイモの収穫であった。大きな葉をつかんでどれだけ強く引っ張ってもびくともしなかった。子どもたちが自分の背ほどもあるサトイモの茎を力いっぱい引っ張り、全身で野菜にぶつかっていく姿は、野菜と一対一の勝負をしてい



ダイコンの収穫 筆者撮影

るようで、子どもたちのたくましさを感じることができた。結局、保護者やスタッフがスコップを使ってサトイモを掘り返し、どうにか収穫することができた。サトイモはたくさんの芋が塊になってくっついており、「スーパーのと違うよ」という子どもの声を聞くことができた。山本さんも、「スーパーに売ってるやつは一個一個がバラバラだけど、本当はこうやって塊になってるんだよ」と子どもたちに説明していた。

サトイモを一つ一つバラバラにする作業のあと、すぐ横に植えていたサツマイモの収穫が始まった。しかし、この年はイノシシにほとんど食べられてしまい、収穫量はほんのわずかであった。参加者は残念そうな様子であったが、自然の中で育てるとはこういうことであると自身に言い聞かせているようであった。



蕁の山で遊ぶ子どもたち 筆者撮影

また、春に植えた稲の収穫も行ったが、この年の猛暑、暴風雨の影響で稲が倒れてしまい、実の入りもあまりよくなかった。山本さんは、農薬を使わず、「子育て農業応援団」ではあくまでも自然の中で育てるということを重視しているため、このような年もあるということを参加者に説明し、参加者も理解しているようであった。収穫した後は比較的実が入っているものとそうでないものとに分け、稲を干す作業を行った。子どもたちは保護者たちが一生懸命稲を選り分けて

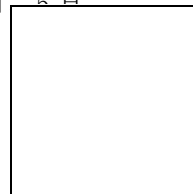
いる横で、「あとでかゆくなるよ～」という声に耳も貸さずに蕁の山に埋まったり友だちに蕁を掛け合ったりして遊んでいた。このとき収穫した稲は、後日行われる収穫祭において、4～5本の束にしたものに「アンパンマン」の絵が浮かび上がった田んぼの写真を添えて配られた。

自然の中で育てるということは、自然との闘いである。「子育て農業応援団」の畑にはイノシシ対策として大きな網が張られていたり、風が吹くと音が鳴る仕掛けがしてあったりといくつもの工夫がなされているが、それでもこの年はイノシシの被害に遭ってしまった。また、天候などはどうすることもできず、稲だけでなく、大豆など収穫が少なくなってしまう作物もあった。自然の中で育てるということは難しいが、その分収穫することができた喜びは大きい。苦労しながら育てた野菜たちには、子どもたちも大きな思い入れがあるだろう。「子育て農業応援団」では自然の驚異や、その中で育てた野菜を収穫できる喜びも味わうことができる。

#### (4) 一年の締めくくり、収穫祭 2010年12月4日 五日

「子育て農業応援団」では、一年の農作業の締めくくりとして、1泊2日の収穫祭が行われる。筆者はこの収穫祭にもスタッフとして参加させていただいた。石川県の金沢市湯涌町にある、「金沢湯涌創作の森」に宿泊し、Tシャツのウコン染め体験や芋煮鍋づくりを行った。

午前中は工房を借りてTシャツのウコン染め体験を行った。使用するウコンは、畑で収穫したものである。先生は「子育て農業応援団」の参加者の一人



ウコン染め体験 筆者撮影

で、美術系の大学を卒業している保護者である。先生の指示に従い、子どもたちはTシャツに模様をつけるために輪ゴムで縛ったり板で挟んだりする。完成した様子を想像しながら作業を進めていき、子どもたちのTシャツはあっという間に輪ゴムだらけになってしまった。スタッフが煮込んでおいたウコンの鍋にTシャツをいれ、染めていく。それを水で洗って脱水をし、ハンガーにかけて干しておく。こうして次の日の朝には乾いて完成するというわけである。中には家族6人分のTシャツを染めるため、たくさんのTシャツに加工をしている家族もいた。昼食を取りながら作業を行い、昼頃には工房の中に黄色く染まったTシャツがたくさん並んでいた。



野菜を切る作業 筆者撮影

ウコン染め体験の後は、芋煮鍋作りである。畑で取れたサトイモをつかって、大きな鍋いっぱい、大量の芋煮鍋をつくる。子どもたちに与えられた仕事は、野菜を切ることである。包丁を持つ手は危なっかしいが、保護者やスタッフに指示されながらも上手に切っていた。「ニンジンもっと切りたい」と積極的に取り組んでいる子どもたちがたくさんいた。包丁を使って調理をしている姿はいつもの走り回っている姿よりも大人びて見え、子どもたち自身も誇らしげであったように思う。また、年長の子どもの小さな子どもたち

の包丁づかいを気にしながら作業している姿も見られた。サトイモの皮むきは滑って難しいため、大人の仕事となり、子どもたちは外へ遊びに行ってしまった。

近くの温泉施設に行き、全員でお風呂に入った後で、夕食の時間となった。子どもたちは子どもたちだけで一つのテーブルに付き、大人とは離れて座った。小さな子どもたちは時々「おかあさん」と保護者を探してやってくることもあったが、基本的には子どもたち同士でおしゃべりをして食卓を囲んでいた。大人たちはというと、お父さん同士、お母さん同士で世間話などしながら交流を深めていた。また、この日は各家庭で作った料理を持ち寄ることになっていたため、テーブルには様々な料理が並んだ。それぞれの家庭の味についての話も弾み、そのこともきっかけとなって保護者たちの交流がより深まっていったように思う。

収穫祭のように、たくさんの家族と泊まりがけで過ごすという経験は子どもたちにとっても貴重な経験となったようである。年の異なる友だちと遊んだり、けんかをしたりして、コミュニケーションの仕方を学ぶことができ、さらに他の保護者からほめられたり怒られたりして、自らの身の処し方も身につくと考えられる。「子育て農業応援団」には、子どもたちの学びのための仕掛けがこのようなところにもなされているのである。

以上が「子育て農業応援団」の主な活動である。ここに挙げた活動の他にも、遊び道具がなくとも自然の中から遊びを見つけることができたり、年上の子どもが自然と小さな子どもたちの手助けをしたりと、「子育て農業応援団」の活動の中には子どもたちにとって貴重な体験をすることができる機会があふれているように思う。3章では、「子育て農業応援団」の代表である山本さんと、活動に参加する保護者に対して行ったインタビューをもとに、「子育て農業応援団」の持つ教育力、社会教育において「食農教育」を行うことのよさ、そして「子育て」と「農」とを結びつけたことでどのような効果があるかなどについて、考察していく。

【第3章 「子育て農業応援団」がもつ教育力～山本さん・保護者へのインタビューから～】

この章では、「子育て農業応援団」代表の山本さんと、活動に参加している保護者の方にインタビューを行い、その話から見えてきたことをもとに、「子育て農業応援団」の持つ教育力について考察していく。なお、このインタビューに協力してくださったのは以下の9名である。

山本実千代さん	「子育て農業応援団」代表
Aさん（母親）：主婦	参加している子ども：2人（男1〔3歳〕、女1〔4歳〕）
Bさん（母親）：子育て支援関係	参加している子ども：4人（男3〔8歳、7歳、5歳〕、女1〔2歳〕）
Cさん（母親）：主婦 （翌年の2月から働く予定）	参加している子ども：1人（男1〔2歳〕）
Dさん（母親）：主婦	参加している子ども：2人（男2〔7歳、5歳〕）
Eさん（母親）：主婦	参加している子ども：2人（男1〔1歳〕、女1〔3歳〕）
Fさん（母親）：主婦	参加している子ども：1人（女1〔7歳〕）
Xさん（父親）	Aさんの夫
Yさん（父親）	参加している子ども：2人（男1〔2歳〕、女1〔6歳〕）

普段の「子育て農業応援団」の活動においても頻りに言葉を交わす機会があり、山本さんや参加している保護者の方からその場で話を聞かせていただくことはできていたが、じっくりとお話を聞かせていただきたいと思い、改めてインタビューの場を設けていただくことにした。山本さんへのインタビューは「子育て農業応援団」の活動日以外にインタビューのために時間をとっていただけることになり、2010年11月25日、山本さんの自宅である「日常生活支援サポートハウス」にて行った。また、保護者へのインタビューは2010年12月4日、5日に行われた収穫祭の中で時間を割いていただき、実施した。母親、父親たちにそれぞれ話を聞かせていただいた。なお、インタビューは母親たち6名、父親たち2名にそれぞれ一斉に行った。

〔第1節 「子育て農業応援団」の取り組みと山本さんの思い〕

(1) 「食べるっていうことがちゃんとできてない」

農業とのつながりのきっかけとして、障がい者にとって農業という活動が適していたというのは第1節において述べたが、さらに根本として、山本さんが関わった子どもたちは、「食べるっていうことがちゃんとできてない」ということだった。ご飯にジュースをかけて食べる子どもや、ほんの少量のご飯に“のりたま”のふりかけを大量にかけて食べる子ども、お昼ご飯はホットケーキでいいといった子どもたちを目の当たりにして、山本さんは「極端な言い方したら、餌なんだよ」と嘆く。これが、山本さんがサポートハウスでの活動を10年やってきた中で見えてきたことである。そのような子どもたちに、食べるとはどういうことか、楽しく笑って食べるということはどんなに良いことかを体験させたくて、山本さんはあらゆる「食」に関する物事を重要視する。子どもたちに、取れたての野菜がおいしいということを体験させたり、苦労して育てた野菜



を収穫する喜びを実感させたりすることも大切であり、そのようなことが農業を行うことにつながっているのだという。

## (2) 「ただの参加者にしちゃいけないと思ってんの」

「子育て農業応援団」での農作業は、多くの学校で行われている「農業体験イベント」のようなものではないという。確かに、整えられた畑の決められた場所に教師の指示で一斉に植えるなどといったイベント的なものではなく、「子育て農業応援団」では畑の空気やゆっくりとした時間の流れを感じ、困難にぶつかりながら自分たちが手を掛けたという意識が持てるような活動を行うことができる。畑を一から整えたり、生い茂る雑草を一生懸命刈り取ったり、育てた野菜が虫やイノシシに喰われて全滅したり、猛暑によって収穫が少なかったりと、「子育て農業応援団」では苦勞が絶えず、安定した収穫を期待することができない。そういった困難があるからこそ、収穫できたときの喜びはより大きなものになるのではないかと。

山本さんは、農作業を行うにあたって、参加者になるべくたくさん声をかけて回る。それは山本さんが意図的に行っていることだそう。子どもたちに野菜が生長している姿を見せ、自然の中で育つ野菜とスーパーで売られている形の整った野菜との違いに気付かせたり、畑で取れた野菜の味はどうだったかなどを尋ねていったりすることで、子どもたちに興味を持たせたり、知らなかったことに気付かせたりすることにつながっている。最近では野菜の収穫の際に、子どもたちからも「スーパーの野菜と違う！」といった声も聞こえる。また、山本さんが活動の際に気を配っていることとして、参加者に「やってもらうようにする」ということがある。山本さん自身はサポートハウスの活動として、平日の畑の管理を障がいのある子どもたちとともにやっているが、「子育て農業応援団」としての活動は基本的には月に2回であり、「それだけじゃ絶対に野菜って育たないのね。取れないし、おっきくならない」と山本さんは話す。そのため、なるべく参加者に声をかけ、野菜に手をかける機会を作ること、参加者が自分たちで野菜を育てているという意識を持つことができるという。「子育て農業応援団」の活動時に山本さんが率先して農作業を行うことはあまりなく、作業の説明をしたり、指示をしたりすることだけに留めていることが多いのはこのためようだ。その代わり、農作業を行う親子の写真をたくさん撮って記録を残すことに専念している様子が見られる。山本さんによると、3年目の今年は意識して野菜の花の写真を撮っていたという。子どもたちにとっては野菜の花などを見る機会があまりなく、とても興味を引くものであったためであると考えられる。筆者も、初めて見るオクラの花にとっても興味を持った。なお、山本さんが撮った写真は「子育て農業応援団」のホームページに載せられる。そのホームページの更新を担当しているのは、イオウ・クリエーション・パートナーズ (ICP) という、石川県にある医王病院の、ALS<sup>9</sup>や筋ジストロフィー<sup>10</sup>などの難病を持ち、病院からなかなか出ることのできない患者さんとソーシャルワーカー、パソコンインストラクターが協力して就労を目的に活動している団体である。パソコンを使ってのホームページ作成、各種文書、名刺等作成が主な仕事の内容であり<sup>11</sup>、山本さんは彼らにホームページ更新の仕事を手伝ってもらうことで、社会

<sup>9</sup> 筋萎縮性側索硬化症。身体を動かすための神経系が変性し、手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉が徐々にやせて力がなくなっていく病気。

<sup>10</sup> 筋肉の萎縮と脱力が徐々に進行し、歩行や運動が困難となる疾病。

<sup>11</sup> イオウ・クリエーション・パートナーズ ホームページ

との関わりを持つ機会を作っているのではないか。彼らは子どもたちが元気に農作業をしている姿を写真で見て、自分たちも外に出たような気がしてとても喜んでいるという。山本さんは、筆者が本論文を書くにあたって、「彼らにもスポットを当てて欲しい」と語る。そこにも山本さんの信念である、「枠からもれてきた人の受け皿になって行きたい」という、様々な状況の人たちにも活躍の場を与える姿勢が表れている。

### (3) 「畑の場所っていうのはね、私は特別な場所だと思ってんの」

子どもたちは、野菜の本来の姿を直接見て、たくさんすることに気付いていく。トマトははじめから赤い実ではなく、緑色の実がだんだん赤へと変わっていくこと、サトイモはたくさん芋が集まって、塊で埋まっていること、オクラの花の色は白っぽく、実はそれぞれが一本ずつ上に向かって育つこと、落花生が土の中でひげのようになっていることなど、栽培・収穫の様子を直に見ていないと分からないことが、畑では知ることができる。においや感触なども教科書を見ているだけではわからない。さらに、子どもたちも保育所・幼稚園や学校以外の新しい友だちができ、異年齢交流も可能であるため、コミュニケーション能力の育成にも役立っているのではないか。

畑での作業は春から始まり、雪が降る前に終わる。その季節の流れの中で、一年を通して子どもたちの成長を見ることができるといえる。山本さんは、「あの、畑の場所っていうのはね、私は特別な場所だと思ってんの」と話す。子どもたちは普段、たくさん便利なものに囲まれて生活している。歩く場所はアスファルトで舗装されており、コンビニも自販機もあって欲しいものはいとも簡単に手に入る。テレビやゲームなど、遊ぶ道具もたくさんある。しかし畑にはそういった便利なものは何もない。眩しくても光を遮るブラインドのようなものはなく、雨が降っても屋根などの雨宿りをするとところもない。さらに、秋が深くなると畑の横を流れる川の水が枯れてしまう。そのため、秋から雪が降る前までの間は、水やりにはポリタンクやペットボトルに貯めた水を大切に使用しなければならない。このことから農業における水の大切さを思い知るのだそう。便利なものが何もないからこそ、普段の生活のありがたみを知ることができ、また不便な環境の中でも工夫して何かをしようとする力も育まれると考えられる。

その中で、子どもたちは野生に戻ったともいえる本来の姿で走り回ったり、虫を見つけて捕まえたりして、自分たちで遊びを見つける。山本さんいわく、親たちはそのような子どもたちの姿を見て、初めて我が子の素顔に気付くのだという。虫を平気で触ることができたり、ぐちゃぐちゃしている土の上をうまく歩くことが出来なかったりといった子どもたちの姿は、街中では見ることができない。また、いろいろな子どもや大人たちと接していく中で、最初は泣き喚いていた子どもが「こんにちは！」と元気に挨拶することができるようになったということも山本さんは感じているようである。そのような普段見られない我が子の姿を見たり、成長を感じたりすることによって、親たちへの子育て支援になっていると山本さんは感じている。山本さんやスタッフたちが直接支援の手を差し延べずとも、畑で活動しているだけで支援となっていることから山本さんは「あそこに行けば畑が先生だよ」といえる。そしてそのような親子の姿を見て、山本さんをはじめとするスタッフたちも畑がもつ力などについて学んでいくのである。

#### (4) 山本さんが見る保護者の姿

山本さんが「子育て中っていうのはね、あの、ほんつとにね、生活の範囲って狭いんですよ」というように、親たちは、普段はとても狭い環境で生活しているようだ。子育て中のお母さんは家と保育所・幼稚園の往復の毎日で、自分の時間も十分に取れないまま一日を過ごしているという。「子育て農業応援団」には、金沢をはじめ、津幡町や野々市町、内灘町などの様々な地域から参加者がやってくるため、異なる地域の保護者たちと交流をもつことができ、おしゃべりを楽しむなど有意義な時間を過ごしている。生活圏が狭く、世間で起こっていることの情報になかなか入ってこないという状況の中で生活しているお母さんたちは、いろいろな地域からやってくる保護者たちと情報交換をすることができるようである。最初はぎこちない様子も見られるが、打ち解けてくるととても近い存在になっているのだそうだ。

また、ゆったりとした時間で活動するようにしていると前述したが、ある日運営への要望として時間を決めて作業を行って欲しいと投げかけてきた、あるお母さんに対して山本さんは、「畑の時間で生きてみようよ」と言ったのだという。そのお母さんは今もその言葉が忘れられず、「あたしも言えるようになりたい」と思ったのだそうだ。そのようなエピソードを語りながら山本さんは、「そこでやっぱり一つ気付くんだよね。何かわかんないけど」という。

子どもたちの成長のみならず、保護者も「子育て農業応援団」の一員として、成長しているようである。今まで二年間活動を行ってきた中で、二年目から「子育て農業応援団」の活動を助ける保護者が出てきたと山本さんは話す。連絡網を使って参加者に活動予定の連絡を回したり、「サポートハウス」として行っている平日の畑の管理作業に参加してくれたりするのだそうだ。それは、山本さんが活動を見てきた中で、「子育て農業応援団」に関する仕事を家庭に持ち帰ってやってきてくれる親が現れてきたときに、「もしかしたらやってもらえんかな」と声をかけたところ、快く引き受けてくれたのがきっかけだという。山本さんは、「中から育ってきてるのね、参加者自身がね」と話す。こうして、「子育て農業応援団」は山本さんのリーダーシップから始まったものの、次第に参加者も運営側の立場として関わるようになることで、「子育て農業応援団」という団体として成長していると考えられる。

#### (5) 「なんかね、とっても違和感があるわけ、虫も喰ってない葉っぱなんてって」

山本さんは、「農業ってものはさ、単なる営利目的とかその生活の糧にするものだけが農業じゃない。そういう人が成長していく場でもあるしって、あたしは思ってる」「いろんなコミュニティーが築ける、築いていける場所だと思っている」という。効率や利益を求めて行われている農業の中でも、水耕栽培<sup>12</sup>について山本さんは技術面において感心を示す反面、違和感を感じずにはいられないようだ。「虫も喰ってない葉っぱなんてって。どんな味がするんだろうみたいな。味が薄いんじゃないかなって気がするわけよ」という思いは、普段から直接土に触れて野菜を育てており、虫が喰うような無農薬の野菜はおいしいということを知っているからではないだろうか。山本さんは畑の野菜は「汚い」というが、味については「おいしいでしょ」と話す。この思いは、もちろん「子育て農業応援団」に参加する子どもたちや保護者たちにも伝わっているようである。

<sup>12</sup> 土壌を全く使用せず、栄養分を溶解した水溶液で植物を栽培する方法のこと。水耕法、水栽培ともいう。

きれいで形の整った野菜を見て、違和感を覚えるような食意識を育てられるのが、この「子育て農業応援団」の取り組みの素晴らしいところであると考ええる。

以上のように、山本さんは「子育て農業応援団」の畑には特別な教育力があり、畑で農作業をしたり遊んだりするだけでも、子どもたちは多くのことを学んでいくのだと感じている。さらに、主婦として子育てを行う母親たちにとっても、「子育て農業応援団」では仲間と交流したり子どもたちの成長を感じたりすることによって、支援となっていると感じているようであった。畑で農作業をすることは、自然とよい効果をもたらすということがいえる。

それでは、「子育て農業応援団」の活動に参加する保護者たちは「子育て農業応援団」の活動に対してどのような効果を感じているのであろうか。第2節では、保護者たちへのインタビューをもとに、保護者の視点からわかる「子育て農業応援団」の魅力について考察していく。

## 〔第2節 参加する保護者の思い〕

### (1) 「子育て農業応援団」に参加する家族

インタビューさせていただいた母親たちのほとんどが主婦であった。中にはわずかではあるが、現在も働いている人や、インタビュー当時の翌年から派遣で働くことが決まっている人もいた。インタビューをしていると、転勤のために金沢に転居してきたという人が何人かおり、子どもがまだ小さいということも重なって、定職に就かず主婦やパートとして働いている人が多いのではないかと感じた。また、インタビューさせていただいた父親の一人は営業として働いており、帰宅時間は比較的遅いようである。その分朝出かける前に子どもとの時間を取ったり、休日は必ず子どもと遊んだりしているようだ。もう一人の父親は特に意識はしていないというが、比較的子どもとの時間が取れるようである。二人とも子育てに積極的に参加しているようであり、家庭における子育ての方針としては母親と話し合っ、二人とも「できる方ができることをする」ということにしているようである。

### (2) 参加のきっかけ 「あたしは全然興味なかったんやけど」

第2章でも述べたように、参加者が増えていくに従って、保護者同士の繋がりから誘い合っ、参加を決めた家族もいれば、「子育て農業応援団」団長の山本さんと元々知り合っ、山本さん本人に誘われて参加したという母親もいる。Bさんは山本さんがかねてから関わっていた「教育プラザ富樫」という施設で働いており、山本さんはその方の子どもたちのことも良く知っていた。腕白な男の子たちにとっては自然の中で走り回れるということからその活動に魅力を感じたが、生まれたばかりの小さな子どもがいたために参加をためらっていたところ、山本さんから「ちっちゃい子連れた人もおるし来てみんかっ、言われて」、参加してみたところ、「楽しかったから、入った」のだという。さらに、Cさんのように「あたしは、いつもなんか休みの度に外で遊ぶのが好きで、なんかそういうのいかなって思っ」というように、自分から積極的に子どもとともに活動できる場を探し、意欲的に参加を決めた人もいた。Cさんは、そのような活動の場を求めて上述した「教育プラザ富樫」へ足を運んだところ、「子育て農業応援団」の活動を紹介するチラシを見つけた。しかし、インターネットなどを利用して参加の申し込み方法を探しても見つからなかったため、その時点では参加を諦めていた。しかしあるとき、「教育プラザ富樫」で再び「子育て農業応援団」のチラシを見つけたのをきっかけに、「教育プラザ富樫」の職員の方に参加方法を尋ねたところ、その日は丁度「わいわいバザール」に参加するために団長の山本さんが来ており、その場で説明を聞いて参加を決めたという。

このように、「子育て農業応援団」への参加のきっかけはバラバラではあるが、母親たちが声をそろえて話すのは、「農業にはあんまり興味はなくて」ということである。話を聞かせてくれたほとんどの母親が、農業経験はこれといっであるわけではなく、むしろ苦手な方であったという。Xさんのように「僕は実家が農家なんで多少は」と話す父親もいたが、Dさんは、「嫌いな方やっんです。あとなんか、虫？虫が大嫌い」と話し、他の母親たちも大きく頷いていた。Dさんはこの虫嫌いを克服できるかもしれないといっ、参加を決めたということをお話してくれた。畑では子どもたちが虫を捕まえる度に「見てー」と持ってくるため、もちろん未だに苦手ではあるが、「ちょっと虫がこわくなくなった」「ちょっとはましになったかも」と自身の成長に気付いているようだ。

「子育て農業応援団」への参加を決めた理由としては、上述したように、参加してみることに  
よって、子どもたちはもちろん自身にとっても面白かった、楽しかったということもあるが、子  
どもへの効果を期待して、Dさんは、「子どもたちにいろんな経験させてあげられるかなと思って」  
と振り返る。さらに、「(子どもに) 何でも興味持って欲しいし、できてないけど、率先してやる  
ことないし」と、子どもの現時点の課題を話し、それができるようになって欲しいという願いを  
込め、参加を決めたという。また、Xさんは子どもの身体が弱いということもあり、健康的な面  
で「そういうのを通じたら、ちょっとは良くなるかな」と思い参加を決めたという。

### (3) 「子育て農業応援団」の取り組みから感じる、子どもへの効果

「子育て農業応援団」の活動に参加して、保護者たちは農業体験がもたらす子どもへの効果  
を実感しているようである。転勤をきっかけに福井から金沢にやって来たというCさんは、福井  
にいた頃とは違い「子どもにとってはのんびりできるような環境じゃなくて」と感じており、  
金沢の市街地を「都会」だという。転勤してきてからは子どもになかなか外で砂遊びなどをさせ  
る機会を持ってないでいたところ、「(子どもが) ちょっと砂ついただけで、はあーっていつて払っ  
て、裸足にもなれないし、砂も触れないし、みたいなんになって」しまったという。しかし「子  
育て農業応援団」の活動に参加するようになってから、「今はもう、泥だらけになってこうやって  
遊べるようになった」と話す。そのお子さんは最初の頃は人見知りもひどく、少しでも汚れるの  
が嫌で常に母親に「抱っこ抱っこ」と言っていたそうだが、そのお子さんの活動の様子を見てい  
ると、今ではファーム活動の際に大雨が降っても、元気に畑の中を歩き回る姿が見られる。

Aさんは、「特に何もなかったら、幼稚園だけの世界なんだけど、なんか週末になったら、こう  
やって、いっぱい子どもがおって、お姉ちゃんがおって、よそのお母さんもおって、っていう幼  
稚園以外の世界があるっていうのが、あたしは子どもにとってはいいんじゃないかなって思う」  
と、「子育て農業応援団」における子どもを取り巻く環境についての効果を話す。確かに、「子育  
て農業応援団」では様々な家族やスタッフたちが集まるため、参加する人々が暮らしている地域  
はバラバラである。このような環境の中で活動することによって、「幼稚園とか学校で嫌なことあ  
っても、辛いことがあっても、私は僕は子育て農業応援団に来れば、なんか楽しく集まれる仲間  
がおるっていう、一つの機会じゃないっていうのがすごくいい」と、子どもの「居場所」が複数  
あることの良さを感じられるようである。ある日の活動中に「子育て農業応援団」に参加してい  
るある子どもから、「いじめられていて、最近学校へ行っていない」という話を唐突に切り出され  
たことがある。しかし、「子育て農業応援団」での活動中はそのような辛さを表に出す様子はなく、  
むしろいきいきと活動している姿が見られる。その子どもがいじめにあったことについてあつけ  
らかんと話す様子を見て、どこか一つでも自分を受け入れてくれる「居場所」があれば、自己肯  
定感を失わずにいられるのではないかと感じる。

さらに、「子育て農業応援団」に参加している子どもたちの年齢が異なっているため、異年齢交  
流ができるという点にも触れ、Fさんが「こうやって、なんか、なかなか年上の子と遊ぶ機会と  
か今ないじゃないですか。あたしたちの代はあったけど」というように、今の子どもたちは他の  
年齢の子どもたちと関わる機会が減っているということを保護者たちも感じているようである。  
そして、Cさんがいうように、我が子がたくさん子どもたちと関わって、「いっぱい揉まれて欲  
しい」のだそうだ。筆者が子どもたちの遊んでいる様子を見てみると、小さな子どもが年上の子

どもたちの遊ぶ輪の中に入っていくことがあるが、年上の子どもたちから怒られたり叩かれたりして、時には泣かされてしまうことが多い。そのような経験を保護者たちは我が子に「させたいんです」と話し、我が子が「揉まれる」ことで精神的に成長することを期待しているようであった。まだ小さい子と共に参加しているCさんは、「(子どもが) 友だちと遊ぶとか (年齢的には) 早いけど、友だちと遊ぶねってよく言われるんやけど。(一人で遊ぶのは) つまらんみたいで、だいぶ前から。2歳ぐらいから」と話す。本来ならば年齢的には一人遊びなどが主で、友だちと関わって遊ぶということがなかなか出来ない年頃であるはずなのに、「子育て農業応援団」に参加してたくさんの人と関わっていくことでその子は友だちと遊ぶことができるようになったのではないかと考えられる。

「子育て農業応援団」に参加している家族は、各家庭に帰ってもよく畑での出来事や育てた野菜について話すことが多いようである。「じいちゃん、ばあちゃんに、田植えをして、アンパンマンの絵描いたんだよとか、そういう話をしたり」とすると、Aさんは話す。食卓に並ぶ野菜を見て、子どもたちに「これは畑の野菜？」と聞かれるという家庭も多い。Aさんは「これは畑の野菜？とかってその(食事の)度に聞かれるから、いや、これは違うよって(言う)」と話し、ほとんどの母親はそれに共感する。「子育て農業応援団」での貴重な経験は子どもたちの心に深く残り、食卓にのぼる野菜について興味を持つという効果があるとともに、親子の会話が増えるということにもつながっているといえる。また、子どもたちは「スーパーで買って来たのは食べんけど、ファームの野菜は食べたりする」ようである。今まで食べなかった野菜を、畑で取ってきたものだと分かると食べてみようと思うのだそうだ。保護者たちが口をそろえて言うのが、畑の野菜は味が違う、ということである。畑で取れたピーマンやゴーヤはあまり苦味がなく、子どもたちが喜んで食べるということに驚いたという母親もいれば、自分自身も苦手であったが食べてみると味が違って食べるのができたと話す母親もいた。また、インタビューの中で特に盛り上がった話題は、子どもたちが畑で取れた野菜をその場で生のまま食べていたということである。特に子どもたちはオクラを好んで食べていた。生のオクラを食べることができるということを知らなかったため、これには筆者も驚いた。このように、畑で取れた野菜には特別に思い入れがあるようで、Bさんがいうように「多分ファームのピーマンはそんなに苦くなくて、大好きで、(家族で)一食でピーマン20個くらい食べる」ようで、「結構畑の野菜を調理するときは自分でする」らしく、「自分でピーマン包丁で切って種取るん大好き」なのだそうだ。

畑での経験は調理の手伝いや食事以外の普段の生活にも生かされている。Eさんは、自身の子どもについて、「公園行っても、野草とか見て遊ぶようになりました」と話す。Eさんの知らないところで他の大人や年上の子から遊び方を学び、「こうやって遊ぶんだよ」とやってみせるのだという。遊びについては、現代の子どもたちに言われるように、ゲームやおもちゃなどの普及によって何か道具がないと遊ぶことができないという問題があるが、確かに「子育て農業応援団」に参加している子どもたちは、自分で遊びを作ることができる。普段のファーム活動の中でも、サトイモの葉を剣に見立ててチャンバラごっこをしたり、田んぼに入って泥んこ遊びをしたりしている様子を見ることができる。さらに、Bさんは、今の子どもたちは子ども同士で集まってもゲーム機を持ち寄って、それぞれで遊んでいることを悲観的に話しながら、「すごろくとかもうち自分で作って、俺の作ったすごろくで遊ぼうぜ」と言って学校の友だちと遊ぶことがあると話す。Bさんは、普段から子どもにはゲーム機などをむやみに買い与えたりせずに、子どもが何かを達

成したときなどにご褒美として買うと決めており、ボードゲームなどの「アナログな」道具で遊ばせていることから、子育てへの意識の高さがうかがえる。

#### （４）保護者への効果 「意外と大人の方が楽しい」

子どもへの効果のみならず、保護者自身の意識にも良い効果が見られる。保護者たちは子どもたちと一緒に畑で作業をすることで、気分転換になるようである。畑の仕事は単純作業が多く、Aさんは、「ひたすら草むしりとか、ひたすら苗植えとか、ひたすら水やりとか。なんか、ね。癒される」と話す。無心になって、黙々と草むしりをしたり畑を耕したりすることで、いつも感じている「いらいら一とかもやもや一みたいのとか」から解放され、すっきりするのだそうだ。中には、子どもを夫に預け、気分転換のために自分一人で畑にやっけてきて作業に打ち込むこともあるという母親もいる。このことから、普段の子育てに追われる生活から抜け出して、身体を動かすということが母親たちにとってはかなりの効果をもたらすということが分かる。Yさんのように、子どもを自由に遊ばせておいて自分自身は作業に熱中するのだという父親もいた。「意外と大人の方が楽しい」と話し、父親たちにとって農作業をすることは「大人になって土遊びできる感覚」なのである。「子育て農業応援団」では子どもに付きっきりになって作業をしなくても、他の保護者やスタッフなど多くの大人が子どもたちのことを気にかけているため、安心して作業をすることができる。このような環境があるからこそ、保護者たちは作業に熱中することができ、気分転換をすることができるのではないかと考える。

母親たちは、かつて苦手であった虫も以前よりは平気になり、むしろ野菜の生長を助けてくれるミミズやミツバチなどの益虫に対しては、「自分に言い聞かせて、畑を耕してくれるからって」と捉えられるようになったということ自身を自身の成長だと認識しているようである。

また、見たことのない野菜についても知る機会ができ、調理の仕方が分からない野菜については山本さんなどのスタッフから調理方法を伝授してもらい、調理に挑戦していくことで料理のレパートリーも増えたのだと話す。確かに、ファームで野菜の収穫作業を行うときには、「これはこうしたらおいしいよ」などと情報を交換し合う光景がよく見られる。

自分たちで野菜を育てることで、農家の仕事における苦労やありがたさを知ったという母親もいる。月に2回という少ない活動時間の中ではあるが、その作業を毎日行うということの苦労を想像しながら「ありがたい」と話し、農作業を「こんなに大変で、こんなになんかありがたいものっていうのを初めて知りました。参加して」と感じているようである。今年は猛暑や大雨の影響で思うように野菜が育たなかったり、自然の中で育てているためにイノシシなどに食べられてしまったりと苦労も多かった。大切に育てているからこそ、失敗したときの落胆も大きい。そのような農作業における苦労も「子育て農業応援団」に参加するまでは知ることではできなかったであろう。そのことから、スーパーなどで売られている野菜の値段もかなり安く感じるという。

保護者たちも山本さんと同様に、「子育て農業応援団」で収穫される野菜を「汚い」という。スーパーで売られている野菜と比べると、ものすごく小さかったり、逆に大きすぎたり、さらには歪んでいたり虫に喰われていたり、スーパーの野菜を見慣れている人にとっては見た目違和感を覚えるかもしれない。しかし、「子育て農業応援団」に参加する母親たちは、「きれいな野菜って逆に怖いよね」と話す。「子育て農業応援団」で育てる野菜は自然の力に任せて育てている。葉は虫に喰われて穴だらけになり、豊作のものもあれば収穫が思うようにできないときもある。しかしそれは自然の中で育った証拠であり、保護者や子どもたちも、形は悪くてもおいしいとい



うことを知っているのだろう。逆にきれいに整った形の野菜はどのように育てられているかわからないため、「怖い」感じるのではないか。この部分は農作業を体験したことのない人との認識の差ではないかと考えられる。さらに、そのような汚い野菜でも、「一年前までは捨てとったハクサイとかも、穴あいとったらその部分だけカットして、大丈夫な部分はちゃんと使う」ようになったのだとBさんはいう。それを「成長したっていうか、なんか図太くなった」と感じているようである。

また、鮮度を気にするようになったということや、なるべく地域で作られた野菜を選ぶようになったということも自身の成長と捉えているようであった。

#### (5) 「スタッフの人たち温かいなって思っ」

母親たちは、「子育て農業応援団」のスタッフや他の保護者たちの働きかけにも効果を感じているようである。Fさんは、「公園とかに行っても、そんなに仲良くなれない」と言い、現代では地域との関わりを持ちにくいかもしれない。中にはXさんのように同じマンション住まいの、同世代の家族との交流があると話す保護者もいたが、そういった家族ぐるみのつながりを持つことは難しくなっているようである。一方、Bさんが言うには、「(子育て農業応援団は) お母さんたちも仲良くなって、公平にっていうかね、仲良くなりやすい」のだそうだ。それはスタッフたちがいつも温かく接してくれるということや、Xさんによれば、「こういうところは、農業通じて子育てしましょうっていう目的があるでしょ。でみんなそういうのもとで来てるから、余計なことの話がないわけですよ。だからお父さんもお母さんもそれぞれの話が通じるんですけど」というように、「子育てをしながら農業をする」という同じ目的を持った家族が集まってくるため、話が合って打ち解けやすいのかもしれない。そのため、Bさんは「よその家の子って怒りづらいけど、参加してるお母さんとかお父さんとかも、よその家の子がちゃんと悪いことしたら悪いって、その場で注意された方がいいから、そういうのもちゃんと注意してくれるし、スタッフの人たち温かいなって思っ」と感じているそうだ。Yさんも、「怒ってくれる人がおるってのはありがたいですね」と話す。「自分ちじゃ、自分ちの怒り方しかできんもんで、集団生活の中での怒り方ってうちではなかなかできんからね」というように、いろいろな大人たちに気にかけてもらい、叱られたりほめられたりするという体験を子どもたちにさせることのよさを感じているようである。

#### (6) 父親の力

「子育て農業応援団」の活動では、父親が農作業に参加している家族が少なくない。ファーム活動の中で、父親たちの存在はかなり重要であると山本さんはいう。それは、耕運機をかけたり、鍬を使って土を耕したりするなどの畑の整備を始め、根が深く子どもたちや母親の力だけでは引き抜くことが出来ない野菜を引き抜いたり、男性の力が必要な仕事が農作業には多いからであると思われる。父親たちは「子育て農業応援団」での活動では、無心で汗をかきながら農作業をすることで、気分もリフレッシュしているようである。また、そのような父親たちの姿を見て、子どもたちも尊敬の眼差しを向けている。近年では、職住分離によって子どもたちは父親の働く姿を直に見ることができないと言われている。特に父親は家庭の外に出て働いていることが多いということもあるため、父親たちを敬うことができなくなっており、次第に父親は育児や家庭か

ら疎外されていく。こうした現状から、「子育て農業応援団」は父親の活躍の場となっており、子どもたちに父親の活躍する姿を見せられる絶好の機会となっているのではないか。

〔第3節 「子育て農業応援団」への期待とこれから〕

### (1) 異年齢交流・いろいろな大人との関わり

「子育て農業応援団」では異年齢交流が可能であるということに触れ、Xさんは、子どもたちに対して、「年が上がるなりの、身の処し方とか、集団の中でこう、ね。年長の子がこう、どういう風に下の子見てるとか、逆に今じゃあ自分が何せんなんがとか、どんなこと手伝えばいいんか、見えてきてくれれば」と期待する。「子育て農業応援団」では主に就学前の幼児たちとその家族を対象としているが、その兄弟の小学生が参加することも可能である。とくに調査当時は小学校中学年であったお兄ちゃんたちは、よく弟たちをはじめとする小さな子どもたちの面倒を見てくれていた。そのような姿を見て、小さな子を持つ保護者たちは、お兄ちゃんたちの姿を見て学んで欲しいのだそうだ。活動中には、そのような保護者たちの期待に応えているのか、まだ小さな子どもたちも、自分より小さな子どもを抱っこしてあげたり遊んであげたりしている様子を目にすることがある。このようにして、年の違う子どもと交流することで年長者の振る舞いを直接見ることができ、自分は年少者に対してどう振る舞えばよいかということを実験的に学べるのだと考えられる。

「子育て農業応援団」には、筆者を含め学生のボランティアが数名参加している。また、利用者として「サポートハウス」に関わっている若者も農作業を手伝うことが良くある。若者が小さな子どもたちの面倒を見たり、一緒に遊ぶ姿を見て、「ボランティアとかで参加してくれる学生さんとか若者たちを見て、うちの子も、若者になったら、さっきもお母さんたちと言ったんやけど、なんかそういうね、小さい子たちと遊んだり、いろんな場に、若者だけの場だけじゃなくて、いろんな世代がごちゃ混ぜの場に参加して行って欲しい」とBさんは話す。というのも、Fさんがいうように、「社会に出るっていうか、人間と関わっていくのはすごい大事やと思う。いろんな世代と関わる子どもって、やっぱり、ね。社会に適応していけるかなって」と感じているからだそうだ。上述したように、「子育て農業応援団」では様々な世代の人との交流が可能であるため、保護者たちは、こうした経験を子どもたちにさせることで、社会に出て行くためのコミュニケーション能力を身につけさせたいと感じているようである。Cさんは、「今って、同じ世代の子としか遊べないんだってね」と今の子どもたちが置かれている現状を悲観的に見ており、昔は小さい子と遊ぶときに自分たちでルールを作り、どの年代の子でも楽しく遊べるように工夫したことを思い出していた。

### (2) 大勢で「食べる」ことの魅力

「子育て農業応援団」への期待について、Bさんは、「子育て農業応援団」に対して、「今のまんまでも十分なんやけど」といい、強いて言うならば、「今もいっぱいあるけど、食卓を囲む場面も大事にしてくれたら嬉しいな」と話す。それは、「なんか食卓を囲むとやっぱみんな家族みたいに仲良くなれる」と感じるからだそうだ。母親たちによると、農作業中のおしゃべりでも仲良くなれるというが、そのときは一生懸命になって作業に打ち込んでいるため、やはり食卓を囲んでおしゃべりをする方がずっと仲良くなれるという。大勢で食卓を囲む機会が少なくなった現代では、「子育て農業応援団」のようにいくつもの家族が集まって食事を共にすることはあまりないだろう。保護者同士が食事をしながら会話を楽しみ、それを通じて新たな保護者のネットワークを広げていくために、大勢で食卓を囲むということは「子育て農業応援団」の活動において、これ

からも大切にしていかなければならないと考える。

### (3) 「子育て農業応援団」 これからのありかた

山本さんによると、「子育て農業応援団」が目指すのは、「農業コミュニティを広げていく」ということだそう。子育て農業応援団の発足から3年、無農薬野菜の栽培に興味がある人や、県外から来る障がい者の事業所など多くの人たちがファーム活動などの見学に訪れたという。そのような人たちと関わりを持ちながら、コミュニティを広げていきたいと山本さんは話す。さらに、これから先「子育て農業応援団」の畑で取れたものを売り、ちょっとした収入を得ることで、母親たちのお小遣いを稼ぐ場になればよいとも考えているようである。子育て中の母親たちは、子育てに明け暮れてなかなか働きに出ることが出来ないと山本さんはいう。先にも述べたが、実際に子育て農業応援団に参加している母親の中には、定職についている人はほとんどおらず、半分以上が専業主婦で、仕事をしているといっても主にパートとして働いている方が多いようだ。山本さんは、母親たちが社会に再進出する前の段階として、「子育て農業応援団」の活動に取り組むことでステップアップする時間を持つことができるという。また、「子育て農業応援団」の活動に参加し、農作業を行うことで、「子育てだけに専念している自分じゃないってとこで、気持ちもリフレッシュできて、余裕が出てくる」と山本さんは考える。

さらに、山本さんが「枠からもれてきた人の受け皿になって行きたい」という信念を元に、「サポートハウス」の将来展望について話すのは、新しい取り組みとして「コミュニティカフェかコミュニティレストラン」を開きたいということである。居場所のない若者、子育て中の親、家と会社しか行き場のない父親たちなどの居場所として利用してもらえたら、と山本さんは話す。そして、そこで食事を出したり接客をしたりする裏方として障がいを持つ人たちが活躍することができるといった場所を作っていきたいという。いきなり障がい者が社会に出て行くのでは難しいことも多くあると山本さんは話し、そのコミュニティカフェ（またはコミュニティレストラン）で練習を積んで、社会に出て行く力を付けることができると考えているようである。山本さんは、障がいを持つ人の就労支援としても、こうして受け皿となる取り組みを将来展望として描いている。

## 〔第4節 食農教育への思い〕

### （1）山本さんが感じる、子どもたちの食意識の乱れ

食生活の乱れは、貧困層に限ってのことではないと山本さんは言う。例えば、子どもが成長するに従って、だんだんお金が必要になってくるということがあったり、昇進などによって仕事に対する責任が重くなったりするにつれて、保護者たちは仕事が忙しく家庭を疎かにしがちになってしまうという。そうすると、子どもたちの食事はコンビニ弁当やファストフードなどで済ませることが多くなると山本さんは考える。

また、家にいるのが子どもだけのときにガスコンロなどの火を扱わせることにも抵抗があるということが、保護者たちが子どもたちにコンビニ弁当を食べさせるということの背景となっているのだそうだ。そのようなことも、子どもたちの食生活の乱れの要因になっていると山本さんはいう。問題の原因は貧困などの経済面だけではなく、そもそも大人たちが持つ「食」への意識そのものの中にあるのではないかと。

このことは子どもたちの「ままごと遊び」の中にも現れており、山本さんの聞いた話では、お母さん役の子どもがお父さん役の先生に対して、「今ご飯作ってあげるね」といって、レンジに積み木を入れる真似をし、「チン」したものをビニール袋に入れて差し出したのだそうだ。これは、普段の食生活がコンビニ弁当中心となってしまっており、それが自然と「ままごと遊び」の中にも現れてしまっているということである。さらに、学校教育で食育を行うにあたって、元々子どもたちが持っている「食」に関する知識の基礎があまりにも違いすぎると、心にストンと落ちる子とそうでない子が出てくると山本さんは言う。確かに、「子育て農業応援団」に参加する子どもたちは多くの経験から野菜などについてよく知っており、農業に関する経験も豊富である。このような子どもたちと、生まれてから一度も農業というものに関わったことがなかったり、家族で食卓を囲む機会を持つことがなかなかできなかつたりする子どもたちとでは、学校で「食農教育」が行われても、理解に大きな差が生まれてしまうように思う。そのことを教師はよく理解しておくべきであると考えます。

山本さんは、「(子どもたちは) どっちかって言うと理性よりも本能の方が大半占めてるから、そこを刺激してあげられるような」教育が必要だと話す。確かに、とにかく「食」や「農」に対して興味が向くように仕向けるということが、教師として必要な力量なのではないか。そのことを通して、子どもたちが食べることの楽しさ、喜びについて感じられるような教育をしていかなければならないと考える。例えば、野菜の生長過程に沿って教えていくのではなく、野菜の花を示して「何の野菜の花なの」というように、「そっちの角度から入ったっていいわけじゃない」と山本さんは提案してくれた。

### （2）保護者たちが感じる、「食」の問題

保護者たちにも「食農教育」への思いについて尋ねたところ、Bさんの子どもが通う学校で行われている「食」に関する取り組みについての話を聞かせてくれた。その学校(学級)では、生活科で育てたキュウリなどを各家庭に持ち帰り、翌日どのように調理して食べたのかということを発表させたり、「食べ物クイズ」を当番になった子どもが出題し、クラスの子どもたちが答えるという取り組みを行ったりしているようである。「帰ってきてからも、(子どもが) こういうジャガイモのクイズ出したら、(クラスの) みんななかなか正解せんかって」「俺はジャガイモについ

ていっぱい知ってるんだ」と家でも嬉しそうに話すのだそうだ。その取り組みに対して、「そういうのいいなって思う」と話す。また、食意識の問題についてXさんは、「君らの年代が一番やばいんじゃない」と逆に筆者に問いかけた。子どもたちの通う幼稚園では昨今の「食」に関する問題を受け、積極的な取り組みがなされているのだという。このように、「食」に関する問題も社会に認識されるようになり、これから子どもたちの食意識が改善されていこうとしているのではないかと考える。

Fさんは、野菜の育ち方について、「多分そもそもね、どうなっとなるか考えてないと思う」と話す。畑で育っている野菜を見たことがなければ、野菜とはスーパーに行けばあるものであり、お金をせば手に入るものだと認識しているかもしれないというのである。また、どこかで小学生は魚は切り身の姿で泳いでいると思っているということを知ったことがあるといい、Cさんは「そんな聞いたと思ったら悲しいね」と話す。

さらに、都会の家族の生活に話を移す。都会で働く父親たちは通勤に2時間もかかってしまうこともあるようで、最終の電車を逃すと漫画喫茶に寝泊りするなど、家にいないことが多いという現状であるため、家には母親と小さな子どもだけになってしまうのだそうだ。Bさんはテレビを見て、都会の「エリート」の子どもは野菜の形状を知らないということを知り、「絶対そんなわけないやろ」と思っていたが、東京に転勤になった友だちの話を知り、このようになってしまっている現状に気付いたという。その友だちの話とは、「子どもと小さい赤ちゃんだけで、アパートにおったら、そんな晩御飯を包丁使って作る気持ちになれんから、ほんとに、お弁当買ってきて、親子で食べる晩御飯か、ママ友とファミレスでご飯食べるっていうのが主流」だということであった。そのため、家庭で調理をするという機会が失われ、調理前の野菜の姿を見ることができなくなっているため、野菜の形状を知らない子どもが増えてきているのではないかと話す。

このような現状を思いながら、自分たちの恵まれた生活に気づき、「そう考えたらありがたいし、幸せなんやね」「幸せな生活に今身を置いてるんだね」と話していた。

「子育て農業応援団」に参加している保護者たちは、子どもたちの「食」や「農」に関する教育について、確かに敏感であり、食意識も高いほうであるといえる。しかし、多くの保護者が話すように、「子育て農業応援団」に参加する前までは「食」や「農」には特に関心がなく、農業経験もそれほど豊富ではなかった。むしろ苦手と話す保護者もあり、「子育て農業応援団」に参加した理由も農業にこだわっていたからというわけではない。保護者たちは、「子育て農業応援団」に参加したからこそ、子どもたちや自身の食生活に関心を抱き、積極的に農業に関わるようになったのだといえる。そこで代表の山本さんや「子育て農業応援団」のスタッフから「食」や「農」に関することを学び、自らの食意識を高め、自身や子どもたちの成長を確かめているのではないだろうか。

また、インタビューにおいて保護者が語った内容にもあるように、「子育て農業応援団」での取り組みだけでなく、子どもたちが通う保育所・幼稚園、学校における「食農教育」が重要視されるようになってきたからこそ、保護者たちも子どもたちの食意識、さらには自らの食意識に大きな関心を寄せるようになってきたのかもしれない。また、最近になって食育に関する話題が頻繁に聞かれるようになったため、都会で暮らす人々の食生活を教育機関やメディアなどを通じて耳にし、「こうなってはいけない」と危機感を持つようになったということも考えられる。

以上のように、「子育て農業応援団」に参加する保護者たちが「食」や「農」に大きな関心を持

っている要因にはいくつか挙げられるが、実際に「子育て農業応援団」に参加して農業を体験し、農業の楽しさを感じたり、子どもの成長を目の前で見たりすることで、農業のよさを実感することができるのは明らかである。食育や「食農教育」が叫ばれている今、やはり子どもたちも、その保護者たちも、農業や調理体験を実際に行うということが大切なのではないか。

## 【おわりに】

「子育て農業応援団」のもつ教育力について、フィールドワークやインタビュー調査を通して明らかとなったことを以下にまとめる。

「子育て農業応援団」の取り組みでは、子どもたちが自ら作物を育て、収穫し、調理して食べるということを通して、とても多くのことを学んでいた。インタビュー調査において保護者が語ってくれた、「子育て農業応援団」で育てた野菜であれば食べることができるということが表しているように、子どもたちにとってファームで収穫された野菜は特別である。種や苗から無農薬で育て、炎天下の中で一生懸命水やりをし、その甲斐もあって立派に生長した野菜を直に見ることで、月に2回の活動ではあるが、確実に野菜の生長を感じることができる。これは、農業に携わる頻度として十分なものであるといえる。このように、子どもたちが活動の中で野菜の変化を感じられるようにするために、山本さんやスタッフの日々の声掛けがとても重要になっていると感じる。土の中から小さな芽が出てきたときやつぼみが膨らんで花が咲きそうなとき、さらには小さな実ができ始めたときなど、野菜に変化が見られたときにはすかさず山本さんやスタッフたちが「見て、芽が出てきたよ」などと子どもたち、またその保護者たちに声を掛ける様子がいつも見られる。そのようにして、子どもたちやその保護者たちは野菜の生長に気付いていくのである。こうして「子育て農業応援団」における活動を通して、子どもたちが、食卓に上る野菜がどのようにして作られ、どのようにして調理されているのかということに興味や関心を持つようになるということが期待される。

子どもたちの食意識の改善のためには、子どもたちが日々の生活の中で「食」について学んでいかなければならない。子どもたちが「食」に触れるのは、多くの場合保育所や学校における生活の場面よりも家庭生活における食事の場だといえるからである。したがって、子どもたちの食生活はそれを担う大人たちの食意識にかかっていると見える。「子育て農業応援団」のように、保護者をも対象としている活動においては、保護者の食意識の改善についても期待することができる。と考える。「子育て農業応援団」に参加する保護者たちは、「食」への意識が比較的高いように思われる。もちろん、意識が高いからこそこの「子育て農業応援団」の活動に参加した保護者もいると思われるが、筆者のインタビューに協力していただいた保護者たちの多くは、もともと農業経験が豊富であったり、農業に興味があったというわけではないと語った。子どもに体験活動の場を与えようと参加を決めたが、活動を行っていった結果、子どもたちだけではなく自身の食意識の向上にもつながっていったということである。中には、農業経験はなかったものの、最近では自宅のベランダを利用してプランターでのミニトマト栽培に挑戦したという母親もいた。このように、子どもたちの「食」に関する問題を解決していくためには、まずは子どもたちの食生活を担っている保護者などの大人たちへの働きかけが必要なのである。第2章で紹介した事例の中にもあったように、野菜にも命があるということなどについて我が子に語ることのできる食意識を、保護者などの子どもたちを取り巻く大人たちに身につけさせることが大切なのではないか。

以上より、この「子育て農業応援団」の実践を通して、社会教育における「食農教育」の実践では子どもたちとその保護者、さらには筆者のようなボランティアとして参加する大学生にとっても、「食」や「農」に関する学びがあるということが明らかとなった。それだけでなく、社会教育の場では日々の生活の場以外の「居場所」として安心感をもたらし、子どもたち、保護者たちそれぞれがのびのびと活動することができる。そして、「子育て支援」と「食農教育」とが結び付



くことで、保護者が「食」や「農」に触れる機会を与え、保護者の食意識を向上させることに大きく影響を与えることがわかった。このことが、子どもたちの家庭生活において「食」に触れる機会を増やすことにつながり、普段の生活から「食」に関して意識をしたり、興味・関心が持てるようになると思う。そして親子の会話が増えるということにもつながっているため、この取り組みには現代において乏しくなっているといわれている家庭の教育力をも復活させることも期待できる。また、保護者の気分転換や情報交換の場ともなるなどの効果もあるということが明らかとなった。保護者が安心して子どもたちを遊ばせることができ、自らは日々のストレスを発散するために作業に熱中することができる。保護者同士の交流も盛んに行われるため、保護者同士のネットワークも広がっていく。このような社会教育における取り組みと学校教育とが連携・協力することで、より充実した「食農教育」、あるいはその他の教育実践が可能となるだろう。そのためには、学校側、あるいは社会教育側からも積極的に関わろうとする姿勢を持つべきであると思う。

山本さんへのインタビューの中で語られた言葉の中で、

「枠からもれてきた人の受け皿になっていきたい」

という一言が印象に残っている。このような山本さんの、あらゆる人々を受け入れ、全ての人に活躍の場や機会を与えていきたいという姿勢があるからこそ、「子育て農業応援団」や「日常生活サポートハウス」に関わる人々は皆自分が認められる場を得ることでいきいきと活動することができるのではないかと。また、この姿勢は社会教育のもつ可能性を表していると思う。「子育て農業応援団」の実践は、時間や場所、参加者の年齢などには制限がなく自由であり、望めば誰でも参加することができるという社会教育の性格を存分に生かしている実践だといえる。このように、社会教育は学習者のニーズによって多様な教育を受けることが可能である点で有効な学習の手段であり、これからは教育において重要な役割を担っていくことが期待される。しかし、社会教育を担うものにとってみると、我が国における社会教育の制度はまだまだ整っていないと思われる。「子育て農業応援団」や「サポートハウス」を例に見ても、今日における社会の制度のどれにも当てはまらずに行き場を失ってしまっている人々がいる中で、山本さんはその受け皿となるために日々あらゆる活動に勤しんでいる。この「子育て農業応援団」の土台となっている「サポートハウス」では、スタッフたちの支えがあるとはいえ、すべてにおいて山本さんが中心となって取り組みを行っているため、山本さん一人が抱える負担はかなり大きいものと考えられる。山本さんを頼りにしてやってくる人々の、それぞれによって異なる多様なニーズに応えるためにあらゆる面からサポート体制を整えていかなければならないからである。山本さんの活動が多岐に渡るほど、制度の枠からもれてしまう人々が多いということを表しているため、この山本さんの多忙さと活動の範囲の広さから、社会教育においても行政においてもいかに制度が整っていないかということが明らかとなった。これは、ボランティアスタッフとして「子育て農業応援団」やその他の山本さんの活動の一部に関わることで見えてきたことである。先にも述べたように、社会教育は制限が少なく、比較的自由に活動を展開していくことのできる特徴を持っている。すなわち、これからの社会を生き抜くために多様な能力の習得が求められる今日では、大きな可能性を持つ社会教育に対してますます期待が寄せられるであろう。そのためにも、現代における社会教育の整備や発展が進み、社会教育を担う人々にとっても、社会教育によって学ぼうとする者

にとっても、より一層充実した取り組みがなされることが求められる。

本論文では、「子育て農業応援団」の実践という一事例から社会教育における「食農教育」実践についての教育効果を述べるに留まり、学校教育と社会教育の連携に関する具体的な方法を提案するまでには至らなかった。今後は学校教育を担う立場として、学校教育の現場で行われている「食農教育」の実態を知り、大きな可能性をもつ社会教育といかにして連携し、より充実した「食農教育」の実践を行うための具体的な方策について考察していきたい。

謝辞：本論文作成にあたり、「子育て農業応援団」の代表である山本実千代さんをはじめ、スタッフの方々、活動に参加されている家族の方々など、多くの方々にご協力をいただいた。日々の活動に参加させていただき、快く受け入れてくださったスタッフや参加者の皆様、インタビューにご協力いただいた山本さん、保護者の方々には厚く御礼申し上げます。